

令和 5 年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

附属池田中学校

1 附属池田中学校の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属池田中学校

(2) 所在地

大阪府池田市緑丘1-5-1

(3) 学級数・収容定員

12学級(1学年4学級) 収容定員432人(1学級36人)

(4) 幼児・児童・生徒数

434人

(5) 教職員数

校長(併任) 1人, 副校長 1人, 主幹教諭 1人, 教諭 20人(うち, 臨時的雇用1人), 非常勤講師 5人, 事務職員 6人(事務補佐員4人, 臨時用務員2人)

2 附属池田中学校の特徴

国際バカロレア認定校として国際教育に, SPS 認定校として安全教育に重点を置いている。

3 附属池田中学校の役割

1. 教員養成大学である大阪教育大学の研究校
2. 教員養成大学である大阪教育大学の教育実習校
3. 学び続ける教師のための, 研修・研究に奉仕する学校です
4. 常に新しい教育理念を追究し, その実践を試みる, 研究開発学校
5. 一般生徒, 国際卒業生(帰国生徒, 在日外国籍生徒), 学校災害特別研究生徒からなる混合学級で授業を行う学校

4 附属池田中学校の学校教育目標

自主・自律の精神の育成

知識と感情と意志をバランスよく調和させることによって, 自分自身で考え, 価値判断でき, 責任ある行動がとれる人間の育成をめざす。

5 附属池田中学校の学校教育計画

- ①MYP認定校として, 学際的単元(IDU)の実践, コミュニティ・プロジェクト(CP), サービス・アズ・アクション(SA)の充実を図る。また, 評価(形成的評価, 総括的評価)や振り返りを充実させ, 教員間で実践に係る相互評価を行いながらICT機器の活用を含めた授業力の向上をめざす。
- ②SPS認定校として, 組織的, 継続的に安全教育の実践的研究を行うとともに, 池田地区のめざす児童・生徒像に基づいた安全意識・態度および実践的行動力を醸成する。
- ③生徒の自主・自律を促進する生徒主体の活動を充実させる。また, 不登校傾向や課題のある生徒を支援する体制や環境を整備する。
- ④ワーク・ライフ・バランスを推進するために, 教育活動の充実と働き方改革の整合性を図る。
- ⑤いじめ・体罰・アカハラ・セクハラ・マタハラ・パワハラ等のない人権を尊重する学校づくりを推進する。

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標		自主・自律の精神の育成「全人教育を鑑み、知識と感情と意志をバランスよく調和させることによって、自分自身で考え、価値判断でき、責任ある行動がとれる人間の育成をめざす」					
学校教育計画		1. MYP認定校として、学際的単元(IDU)の実践、コミュニティ・プロジェクト(CP)、サービス・アズ・アクション(SA)の充実を図る。また、評価(形成的評価、総括的評価)や振り返りを充実させ、教員間で実践に係る相互評価を行いながらICT機器の活用を含めた授業力の向上をめざす。					
本年度の重点目標(評価項目)	具体的な取組内容(評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)IB教育に関する授業力の向上および研修の充実	・Unit Plannerに基づく授業の展開および総括課題の充実 ・掲示物の工夫等によるIB授業の構造化 ・2024年の評価訪問に向け、IDUのブラッシュアップ、PSPの共通理解	今年度、教科会議を時間内に設定することで、教員の協働設計の機会を確保することができ、学習内容や評価について質を高めることができた。また、学校評価アンケートより86.5%の生徒が「授業でのICT活用する機会が多い」に当てはまると回答していることから、昨年度に引き続きICT利用についてはできていると考えられる。	学習指導要領とIBプログラムの融合が進んでいく中、生徒の課題に対する負担が大きいのと感じられる。学習内容の精査が必要と考えられる。また、ICT機器に対しては活用が進む中、規律を逸した使用が課題である。ICT機器の使用に対する指導計画の見直しが必要と考える。	A	研究授業の内容に一貫性を感じた。加えて、考え、探究し、工夫して、伝えて、さらに、その先社会に役立てることにつながっている。また、学習内容・評価について学校をあげて研究にとりんでおり評価できる。ICT機器の使用手法や内容については検証をお願いしたい。	A	これまでの研究内容、体制は維持しながら課題に対する生徒負担の軽減、また、ICTの使用については特に情報モラルについてのカリキュラムの構築を行っていく。
(2)ICTを活用した授業の推進および学習指導要領とIB教育の融合	・学習者用タブレットの有効活用および事例の共有 ・学習指導要領が示す「3つの資質・能力」を高める国際バカロレア教育のあり方の追究	授業等において、学習者用タブレットの有効活用は図れている(学校評価アンケート(教職員)のICTの有効活用に対する肯定的回答は100%)。また、IBと学習指導要領との関連付けについては十分でない面がある。	ICTの活用スキルは確実にあがっているが、情報モラルやセキュリティはカリキュラムの構築と計画的な実施が必要である。また、IBの取組成果を学習指導要領の評価に落とし込む作業が必要である。	B	探究や工夫するアイテムの活用については素晴らしいものがあると思えます。ただ、IBと学習指導要領との関連付けについては丁寧に検証をしていただきたい。	A	IBプログラムを学習指導要領に落とし込んでいく作業を、スケジュール管理を行いながら進めていく。

主となって自己点検を行う分掌

研究部
・IB委員会

教育推進部
・ICT委員会

学校教育目標		自主・自律の精神の育成「全人教育を鑑み、知識と感情と意志をバランスよく調和させることによって、自分自身で考え、価値判断でき、責任ある行動がとれる人間の育成をめざす」					
学校教育計画		2. SPS認定校として、組織的、継続的に安全教育の実践的研究を行うとともに、池田地区のめざす児童・生徒像に基づいた安全意識・態度および実践的行動力を醸成する。					
本年度の重点目標(評価項目)	具体的な取組内容(評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)安全教育カリキュラムの確立	・生徒の主体性を重視したカリキュラムの推進 ・地域や外部機関と連携した教育実践の充実	・安全点検では教師が点検を行うだけでなく、生徒も点検を行い、校内の安全の環境を守る意識をつけさせた。また救命救急講習で対応できる自信をつけるような指導をおこなった。	・安全委員の意識は高く、コーナードの取り付けや安全点検を意識的にやるように指導されている。教員が安全点検の意識を高め、定期的な安全点検で改善する部分をまとめたりして、整備を徹底する。	A	生徒個人、学校全体、地域性の面においては毎年の努力を感じる。今後も安全教育の進展に向け、生徒主体のカリキュラムの推進や体験活動の拡充に努めていただきたい。	A	生徒に課題を意識させ、生徒がより主体的に取組める内容にする。また、一部の生徒だけではなく生徒全体が主体的に取組めるしくみを構築していく。
(2)安全管理の充実	・日常の危機管理の充実 ・訓練前後の振り返りの充実 ・安全点検の毎月実施	・定期的に各クラスでヒヤリハットの実施を継続している。 ・地震対応、火災対応の避難訓練後、振り返りをおこない、次年度の訓練に引き継いでいる。 ・毎月の安全点検を生徒も共におこない、安全の意識を生徒と共に高める機会を持っている。	・継続的にヒヤリハットや安全点検を行い、安全の意識を持たせ続ける工夫を行う。また避難訓練の振り返りを元々色々のシチュエーションの避難訓練を検討して、備えを行う。	A	ヒヤリハットシステムは、社会人になったときに非常に役立つと思う。生徒とともに安全点検をしているところは非常に評価できる。今後も生徒の実感が伴うような安全意識の高揚に努めていただきたい。	A	ヒヤリハットシステムの有効活用を推進させる。視覚化を図り、来校者にも活用していただけるようにする。
(3)SPS校としての取組の充実と国内外への発信	・校内の救命講習の実施(生徒・保護者) ・セミナー等での発表および視察の受け入れ ・ヒヤリハットシステムの運用、活用	・12月に本校の応急手当普及員の指導のもと、救命救急講習(生徒・保護者)をおこなった。 ・研修で安全の取り組みを発表する機会をもった。 ・定期的に各クラスでヒヤリハットの実施を継続している。	・救命救急講習で学んだことを生徒会事故対応訓練で振り返り、実際の場面でも落ち着いて対応できるように、研修で学んだことを生徒に伝える。	A	今後も安全に係る取組を積極的に外部に発信していただきたい。また、ヒヤリハットシステムの継続的な取組に期待する。	A	安全の取組を発表で終わることなく、様々な学校、地域と交流を図り、さらに、ネットワークを築いていく。

生徒支援部
・安全委員会

学校教育目標		自主・自律の精神の育成「全人教育を鑑み、知識と感情と意志をバランスよく調和させることによって、自分自身で考え、価値判断でき、責任ある行動がとれる人間の育成をめざす」					
学校教育計画		3. 生徒の自主・自律を促進する生徒主体の活動を充実させる。また、不登校傾向や課題のある生徒を支援する体制や環境を整備する。					
本年度の重点目標(評価項目)	具体的な取組内容(評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)生徒との信頼関係を基にした内面に迫る生徒指導、規範意識の向上と生活規律、学習規律の徹底、いじめや不登校への対応	・SCと打ち合わせ(週1)、メンタルサポート会議(月1)の実施 ・保健室との連携、ケース会議の適切な運用を図ったチーム対応の推進 ・Q-U検査や生活アンケートの有効活用、支援が必要な生徒の把握および支援計画等に基づくサポート体制の充実	・SCとの打ち合わせは学び支援コーディネーターを中心に、管理職・生徒支援部部長の出席のもと行われた。メンタルサポート会議は案件があれば会議をもったが、それ以外の部分で行われることは少なかった。 ・ケース会議をおこない、支援が必要な生徒の支援をおこなった。別室などの対応も検討、実施した。 ・いじめアンケート、QU検査は各学期で分析を行い、報告を行なっている。活用に関しては検討が必要だと感じる。	・職員会議で全体での共有がしやすいように、メンタルサポート会議での生徒情報の交換を定期的に行い、具体的な支援内容をまとめるシートを作成をおこなう。 ・ケース会議用の資料の精査をおこない、ケース会議までの過程を示す。 ・いじめアンケートやQ-U検査の分析結果を学校全体で共有し、対策を考える機会をつくる。	B	困難なケースに難しさも感じますが、しっかりと向き合っていることを感じる。ただ、SCのみならずSSWもケース会議に加わってもらう必要があると考える。生徒情報を一元化できるシートや体制の強化は重要。不登校生徒の学習支援および居場所づくりの拡充も大切であるとする。	B	課題の共有を円滑に行うことを第一に課題として、共有シートの運用を行う。また、ケース会議を通じて、不登校生徒等の支援、居場所づくりに努める。
(2)生徒の主体性を重視した教育活動の展開、自治活動の充実	・生徒の主体性を重視した、CP,SAの充実 ・生徒の自主自律を促進する学校行事、部活動の展開 ・生徒会活動の充実	・CPやSAを進める形が整い、生徒が選択しながら活動を行うことができている。 ・学校行事はコロナ禍の前の形に戻ってきた。今後詳細を修正して生徒が関わることができる部分を増やしたい。 ・部活動は今後あり方を変えていくことになるだろうが、生徒や保護者のニーズとのバランスが難しい。	・部活動のあり方を検討しているが、教員の負担と生徒や保護者のニーズが合わない。お互いに負担のないような部活動のあり方を検討していく。	B	地域全体で拝見させていただいた限りでは、とても素晴らしいと思う。また、部活動の地域移行等について、どのように展開していくのか大学を含めた議論が必要であるとする。	A	部活動を生徒の自主自律を育む活動と位置づけ、活動日数を減らしながらも質の充実を図る。

生徒支援部
・生徒指導
・メンタルサポート
・生徒会

学校教育目標		自主・自律の精神の育成「全人教育を鑑み、知識と感情と意志をバランスよく調和させることによって、自分自身で考え、価値判断でき、責任ある行動がとれる人間の育成をめざす」					
学校教育計画		4. ワーク・ライフ・バランスを推進するために、教育活動の充実と働き方改革の整合性を図る。					
本年度の重点目標(評価項目)	具体的な取組内容(評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)就業管理システムの活用による働き方の見直し	・就業管理システムの適正な活用 ・適切な振替や超過勤務時間の管理	・導入当初、就業管理システムの使い方が不慣れであったが、現在は適正な活用が図れつつある。 ・部活等の振替先が少なく円滑な振替が行えていない。	・就業管理の適切な活用を促進し、自分自身の働き方を見直す一助にしたい。 ・勤務日数の増加により、振替を円滑に行う環境を整備する。	C	課題はあるかと思うが、改善に向けて取り組んでいることが伺える。最終的にはやはり教員の意識改革でしょうか。	B	全体で共通認識を図りながら、年間の勤務日数を増やすことにより、より実態に合った振替措置が行いやすい環境にする。
(2)行事、会議、研修等の整理および効率化を図る。	・会議、研修を設定時間内に終了	・運営委員会で提案内容等を調整することにより、時間内に会議を終了することが増えてきた。	・会議の効率化を図るだけでなく、情報の共有化を促進することで、より会議時間の短縮を図る。	B	改善に向けての取組や努力が伺えるが、行事を含めた会議や研修等の効率化を図ることがさらに必要ではないかとする。	B	必要な会議の効率化だけではなく、会議の必要性を精査し、廃止、統合を図る。

管理職
主幹

学校教育目標	自主・自律の精神の育成「全人教育を鑑み、知識と感情と意志をバランスよく調和させることによって、自分自身で考え、価値判断でき、責任ある行動がとれる人間の育成をめざす」						
学校教育計画	5. いじめ・体罰・アカハラ・セクハラ・マタハラ・パワハラ等のない人権を尊重する学校づくりを推進する。						
本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)学級づくりや個々のコミュニケーションに基づく生徒理解の推進および課題の共通理解と早期のチーム対応	・メンタルサポート会議等から課題のある生徒の共通理解、チームとして役割分担や対応の充実	・学び支援の会議やケース会議を経て、共通の認識をもちながら生徒の支援を行う体制が少しずつでき始めた。	・学校全体で共有できるようなシートをつくったり、それを元にどのような支援が必要なのかを検討したりする機会を設け、情報を共有する手段や機会を工夫する。	B	専門的な知識が必要な課題もあるが、今後のますますの生徒指導体制の確立に期待したい。共有シートの作成は早急に取組む必要があると考える。	B	課題のある生徒に係るアセスメントとプランニングの共有を図り、支援体制を整備していく。
(2)生徒-教師間、教師間においても人権を配慮した安全・安心な環境づくりを推進する。	・アンケート等による実態の把握および研修等による意識の醸成や改善	・いじめアンケートやQ-U検査を用いて、生徒の課題を把握し、学期の最後に報告と分析をおこなっている。	・生徒に対する具体的な支援方法を提示できるように、フィードバックする方法を検討する。	B	こつこつと取組んでいることが伺える。アンケート等の分析をどのように指導に生かすのかが重要であると考える。	B	アンケートの分析を生徒の実態に応じてフィードバックできる具体的な方策を進める。

生徒支援部
生徒指導
メンタルサポート

学校教育目標	自主・自律の精神の育成「全人教育を鑑み、知識と感情と意志をバランスよく調和させることによって、自分自身で考え、価値判断でき、責任ある行動がとれる人間の育成をめざす」						
学校教育計画	6. 大学・大学院・附属学校池田地区、他学校等の連携、保護者・地域との連携						
本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)大学、池田地区およびIB校等との連携を図る。	・池田地区将来構想に基づく、大学教員および小学校、高校との連携・協議の充実 ・積極的なIB校への視察や受け入れおよびネットワークの拡充	・学校評価アンケート(教職員)から、探究的な学びの研究を全校的に取組んでいる肯定的回答は100%である。また、研究会では、すべての教科領域で本学の教員が指導助言者を担った。また、研究、教務、生徒指導では小中高の連携が深まった。	・池田将来構想の達成のために、小中高12年間を通した児童生徒像の具体的な姿を示す指標を創りあげ共通理解を図る必要がある。	A	研究授業や協議会を拝見して、小中高の連携については、どの学校の教員も意識を高く持って取り組んでおり評価できる。	A	小中高の共同研究テーマから、具体的な研究につながる体制や進め方を継続的に図る。また、それらをアンケート等から検証する。
(2)保護者・地域との連携	・登校立ち当番等のPTA活動の活性化および行事等を通じた保護者との連携 ・警察、消防、市役所、地域自治会との連携	・登校立ち当番の達成率は約90%、学校評価アンケート(保護者)から、保護者と学校の連携に関して肯定的回答が93.1%であり、しっかりと連携は図れている。 ・地域との連携は、コロナ等の感染症の影響もあり、十分ではない。	・保護者、地域等の連携について、適切な時期に、必要な情報を積極的に発信することでさらに連携を向上させたい。	B	PTA活動の中で最も意義のある立ち当番を継続して取組んでいて、大いに評価できる。保護者や地域には、様々な媒体を活用して校内の取組や研究等をアピールしていくことが可能であると考える。	A	保護者とは、学校安全の取組に関して、効果的な連携を継続する。また、地域の方々の意見、助言をいただくことで、地域との連携強化を図る。

管理職
主幹

学校教育目標	自主・自律の精神の育成「全人教育を鑑み、知識と感情と意志をバランスよく調和させることによって、自分自身で考え、価値判断でき、責任ある行動がとれる人間の育成をめざす」						
学校教育計画	7. 教育実習の充実						
本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)教育実習の充実	教科指導や学級指導において、指導教員を中心とした個々の教育実習生の課題を把握、各教科・実習部・管理職・大学と協体制の確立	・生徒の実習生に対する満足度は高い(学校評価アンケートから肯定的回答は86.5%)。また、実習生の様子、課題等は指導教員だけではなく全体でも情報共有を図っており、実習生自身の満足度も高い。	・実習生間で情報交換や課題共通を図るために、実習生が集える場所を確保した。次年度も継続するとともに、さらに有効な場として、また、新たな取組を創出できる機会とした。	A	アンケートの結果からも生き生きとした様子が見える。また、教育実習生に対する指導は、これまでより実績があり評価できる。教師へのあこがれや魅力を感じる指導を今後も期待したい。	A	教員になるというモチベーションが高まるような教育実習の在り方を継続的に追究していく。

実習主任
管理職